

## A20b 世界の流星電波観測によるしし座流星群の全容解明

小川宏(筑波大)、豊増伸治(みさと天文台)、大西浩次(長野高専)、朝日奈隆(名城大附高校)、宮尾佳世(旭丘高校)、網倉忍(筑波大)、前川公男(福井高専)

流星の電波観測は、昼夜・天候に関係なく観測が可能である。さらに、流星群活動は、流星群の輻射点が地平線下に沈むと、活動がみられなくなるので、輻射点に左右されずに観測ができれば、常に、流星群の活動を監視することが可能となる。2001年しし座流星群では、アメリカ方面や、東アジア・オセアニアで大出現の予報がなされていた。そのため、世界中の流星電波観測結果を統合し、しし座流星群の全活動を監視するプロジェクト”しし座流星群流星電波観測プロジェクト”を立ち上げた。11月初旬には、アメリカ・イギリスなど日本を含めた世界12カ国、67観測地(内国内56観測地)からの参加があり、壮大なしし座流星群監視網が完成した。プロジェクトのホームページでは、速報を始め、各地点の現在の状況も中継された。18日15:00(JST)頃から、アメリカのデータに増加傾向が見られた。その後、21:00頃にはアメリカで20時台にピークがあったことがわかり、情報を各所へ配信した。そしてオーストラリア・日本とピークを迎えた。この観測網によって、しし座流星群の増加傾向を事前に連絡できたのは、このネットワークが有効に機能した結果といえるであろう。しし座流星群後にも、事後報告が相次ぎ、12月の時点では、世界13カ国、85観測地(内国内76観測地)からデータが集まっている。これら全データより、しし座流星群の活動の全容解明を行った。各地の異なった観測機材による観測流星数の差は、データを規格化することによってその比較が可能となっている。今回のプロジェクトによって、しし座流星群の全容解明へつながる可能性が高いことに加えて、常設すれば、流星活動の常時モニターになることも今後期待される。